

保健体育科教員養成課程における遠隔会議システムを
利用した保健分野の模擬授業の実践的検討

Practical Study on Trial Teaching in the Field of Health using a Remote
Conference System in a Teacher Training Course in Health and Physical Education

杉 岡 品 子
SUGIOKA Shinako

北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要

第13号 2022

保健体育科教員養成課程における遠隔会議システムを 利用した保健分野の模擬授業の実践的検討

Practical Study on Trial Teaching in the Field of Health using a Remote Conference System in a Teacher Training Course in Health and Physical Education

杉 岡 品 子
SUGIOKA Shinako

I. はじめに

我が国では、将来、知識基盤社会を生きていく子ども達の教育に、幅広い視野と高度の専門的知識・技能を有した高度専門職である教員が当たることを目的として、教員養成の基幹部分である教職課程は、学芸と実践性の両面を兼ね備え、高い水準の教員を養成することが求められてきた。しかし、その要請に応えることは容易ではなく、初任者が実践的指導力や学校現場の課題への対応力の不足などの課題が指摘されてきた¹⁾。そして、平成27年中央審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」²⁾では、大学が教職過程を編成するに当たり参考とする指針（教職課程コアカリキュラム）を関係者が共同で作成し、教員養成の全国的な水準の確保を行なっていくことが必要であると明記された。これを契機として、「教職課程コアカリキュラム」¹⁾では、各教科の指導法（情報機器及び教材の活用を

含む。）における「当該教科の指導方法と授業設計」の到達目標の1つとして、「模擬授業の実施とその振り返りを通して、授業改善の視点を身に付けている」ことが挙げられている。大学の教職課程の各教科法等の講義では模擬授業が行われ、保健体育科・体育科の教職課程においても同様に模擬授業が実施され、これまで実践報告や模擬授業の学びや効果に関する研究がなされている³⁾⁻⁸⁾。本学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科においても、保健体育科教員養成のカリキュラムの教科に関する科目では、主要な領域のスポーツ種目において「指導演習」の科目〈例：生涯スポーツ指導演習（陸上競技）等〉を配置し、模擬授業を取り入れた演習形式で実施している⁹⁾。また、教職に関する科目では、「保健体育教育法Ⅲ～Ⅳ」「教育実習事前指導」において、体育分野及び保健分野の模擬授業を取り入れた演習を実施している。

模擬授業とは、「教員養成過程にある学生や研修中の教師が、授業の組み立て方や指導法などを体験的に学んだり検討したりするた

めに、実際の授業を想定した場で実践を模して行う授業¹⁰⁾であるとされているように、一般的には、教室での対面授業(=実際の授業を想定した場)で実施されている。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の拡大により、2020年度は、大学においても新学期当初からこれまで行ってきた対面授業の実施が不可能となった。これにより、学事日程の変更や遠隔授業の活用¹¹⁾の検討がなされ、多くの大学で対面授業は実施されず遠隔授業となった¹²⁾。このため、各大学では、それぞれの時期における感染の状況等によって、教室での模擬授業はできなかった大学もあったことが推測される。そして、2021年度は、十分な感染対策を講じた上での面接授業¹³⁾の実施が求められていたが¹⁴⁾、新型コロナウイルス感染症の拡大により、全国的に緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の発出、期間延長、区域変更などが繰り返された。これに伴い、文部科学省から、大学では新型コロナウイルス感染症への対策の徹底と学生の学習機会の確保の両立に取り組むとともに、緊急的な時限措置として遠隔授業を適切に活用する等の工夫を講じて学生等の学習機会の確保の要請がなされた¹⁴⁾。未だ収束の見通しが立っていない現状において、教員の実践的指導力につながる模擬授業という学習活動を実現するためには、遠隔授業における模擬授業の在り方を検討することが喫緊の課題である。

これまで、大学の教職課程において遠隔会議システム¹⁵⁾を利用した遠隔授業(同時配信授業〈同期型〉)¹⁶⁾で模擬授業を行った研究及び報告がなされている¹⁵⁻¹⁸⁾。しかしながら、それらは音楽や英語といった科目、50人以下の受講生を対象としたものであり、本学のよ

うな保健体育科を対象とする大人数授業の研究は見当たらない。

そこで、本研究では、本学で開講されている教職に関する科目「保健体育科教育法Ⅲ」において遠隔会議システムを利用した遠隔授業(同時配信授業〈同期型〉)で模擬授業を実施し、受講生による評価を通して、遠隔授業における模擬授業の実施方法、効果と課題等を検討する。

¹¹⁾ 文部科学省の通知では「面接授業」とされていたが、その後の通知等では「対面授業」と記載されているものもある。両者ともに実質的な違いはなく、本研究では「対面授業」とする。

¹²⁾ 遠隔会議システムはWeb会議システムとも言われ、インターネットを通じて遠隔地にいる相手と会議を行えるツールである。Microsoft Teams, Zoom, Google Meetなど様々ある。

¹³⁾ 遠隔授業はオンライン授業とも言われ、リアルタイムで学生と同時接続し授業を展開する「同時配信授業」〈同期型〉と資料や動画配信し学生が自分のタイミングでアクセスする「オンデマンド授業」〈非同期型〉がある。

Ⅱ. 研究方法

1. 対象科目と対象者

対象科目は、2021年度前期に本学で開講した「保健体育科教育法Ⅲ」(教職に関する科目 担当教員は筆者)である。対象者は、本科目の受講生101名(3年生83名, 4年生15名, 科目履修生3名)であった。

2. 使用した遠隔会議システム

対象科目では、遠隔授業(同時配信授業〈同期型〉)とオンデマンド授業(非同期型)を組み合わせ、模擬授業は同時配信授業〈同期型〉で実施した。同時配信授業〈同期型〉は、遠隔会議システムのMicrosoft Teams(以下Teams), オンデマンド授業〈非同期型〉は、

学内サイトであるポータルサイトを使用した。Teamsはチャット、通話、ファイル共有、Web会議などが可能なグループウェアである。今回、模擬授業で使用した機能は「チャンネル」である。「チャンネル」とは、チーム内のメンバーと会話（スレッド）を交わす場所で、固定されたメンバーのみでWeb会議を行うことが可能である。

ポータルサイト及びTeamsは、いずれも2020年度から本学で全学的に推奨されたシステムである。2020年度前期はほぼ対面授業はなく、後期もほぼ遠隔授業であったため、本科目の受講生は使用方法などについては理解していたと考えられる。

3. 授業の概要

1) ねらい・到達目標

本科目は、3年次前期に配置され、「保健体育科」に包含される中学校「保健分野」（以下：「保健分野」）、高等学校「科目保健」（以下：「科目保健」）の学習指導方法に関するものである。このため、「保健体育科」の教科目標を実現することを基盤とし、「保健分野」、「科目保健」の学習指導を到達すべき方向に向けた指導を行うものである。

したがって、本科目のねらいは、「保健体育科の目標を実現するために、学習指導を計画的・系統的に、しかも効率的に進め、調和の取れた指導計画の立案・作成を実践的に追求し、より良い授業にするための改善の視点を身につける」こととしている。

そして、到達目標は、「保健体育科の目標、中学校「保健分野」・高等学校「科目保健」の目標及び内容、並びに全体構造を理解できる」「生涯にわたり健康な生活を実践できる

保健授業の学習指導方法が理解できる」「生徒の個に応じた指導の充実を目指す学習指導方法が理解できる」「学習指導案の構成を理解し、具体的な授業を想定した指導計画の立案・作成をすることができる」「模擬授業の実施とその振り返りを通して、授業改善の視点を身につける」の5つを位置付けている。

2) 授業計画

授業計画は、表1の通りである。本研究では、第1～6回は、ポータルサイトによるオンデマンド授業〈非同期型〉、第7～15回は、Teamsによる同時配信授業〈同期型〉、第16回の振り返りとまとめ（試験を含む）は対面で実施した。

4. 授業の詳細と実際

模擬授業に関連する授業の詳細と実際は、以下の通りである。なお、本来、模擬授業は「単位時間全体を使い、多くのスキルを複合的に動員してあるテーマ・単元を教える総括的な練習」¹⁰⁾であるが、「これらの要素を限定縮小して行うマイクロティーチングも広い意味では模擬授業である¹⁹⁾とされている。本科目では、受講生が100名を超え、模擬授業を実施する授業回数も限られていることから、テーマ・単元を教える総括的な練習を限定縮小した形のマイクロティーチングを模擬授業としている。

1) 第7～8回：遠隔授業（同時配信授業〈同期型〉）

第2回～第6回で学習したことを基盤とし、各自で高等学校「科目保健」のテーマ（担当教員がテーマを割り振り）の教材研究を行い、学習指導案（個人）の作成を進める。そして受講生は、同時並行で5～6人のグルー

表1 保健体育科教育法Ⅲの授業計画

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	目的、目標、展開内容、評価方法を説明する
第2回	中学校・高等学校『保健体育科』教育課程の編成	中学校、高等学校の教育課程の理解を深める
第3回	『保健体育科』の教科目標、中学校「保健分野」高等学校「教科保健」の目標	『保健体育科』の教科目標、中学校「保健分野」・高等学校「教科保健」の目標を理解する
第4回	中学校「保健分野」・高等学校「教科保健」の年間指導計画、単元計画	学校行事、他教科との関わり及び地域、学校事情等を考慮した配当時間等を学ぶ
第5回	中学校「保健分野」高等学校「教科保健」の学習指導案(1)	学習指導案作成時に留意する事項を理解する
第6回	中学校「保健分野」高等学校「教科保健」の学習指導案(2)	学習指導案の作成について学ぶ
第7回	保健授業における学習の進め方(1)	授業展開時の内容・ポイント等を研究する
第8回	保健授業における学習の進め方(2)	授業展開時の教材、教具、機材活用等を研究する
第9～15回	模擬授業(1)～(6)	模擬授業を実施し、評価・課題等の整理をする
第16回	振り返りとまとめ	振り返りと確認の試験、まとめを行う

ブ毎（担当教員がグループ編成し、テーマを割り振り）に、学習指導案（グループ）の作成、模擬授業の準備を行う。

当日の具体的な内容は以下の通りである。

- ・受講生は、各自の端末（パソコン、タブレット、スマートフォン）でTeamsの本科目の全体「チャンネル」でWeb会議に参加し、担当教員から当日の流れや同時配信授業及びWeb会議における注意事項などの説明を受けた。
- ・続いて、3年生は各グループ「チャンネル」でWeb会議に参加し、与えられた高等学校「科目保健」のテーマに基づき、学習指導案の作成、模擬授業の準備のためのミーティングを行った。ミーティング中、担当教員は順次各グループ（今回は5～6人で14グループ編成）「チャンネル」に参加し、話し合いの状況を確認し、質疑応答や必要に応じて助言した。

なお、4年生、科目履修生は2020年度に模擬授業を実施済みのため、全体「チャンネル」のWeb会議から一旦退出し、各自で学習指導案の教材研究などを進めた。

- ・最後に、受講生はTeamsの本科目の全体「チャンネル」のWeb会議に参加し、担当教員から次回の授業の説明を受けた。

授業後、3年生は、事前課題として模擬授業までにグループの学習指導案をTeamsの各グループ「チャンネル」で提出し、担当教員はフィードバックを行った。それを受けて、学習指導案を再考した上で、予行演習を行い、録画した動画を各グループ「チャンネル」に投稿した。担当教員は動画を閲覧し、フィードバックを行い、各グループで模擬授業の準備を整えた。

2) 第9～15回：遠隔授業（同時配信授業〈同期型〉）

1回（90分）の授業において、模擬授業を

実施する受講生（以下教師役）の2グループが作成した学習指導案の模擬授業を実施し（30分の授業を、1人5～6分ずつ交代しながら行う）、模擬授業後に明確となった課題を整理する。他の受講生（以下生徒役）は、生徒役として参加し、模擬授業を評価し、教師役に授業内容を評価・フィードバックする。

尚、受講生は2年次後期科目「学校保健」で大学院生等による保健分野の模擬授業を受け、授業の進め方、最近の話題や具体例の取り入れ方、説明の仕方等を学んでいる。

各回の具体的な内容は以下の通りである。

- ・教師役の3年生2グループ（10～12名）は、大学の教室で、Teamsの全体「チャンネル」のWeb会議で、学習指導案（グループ）の模擬授業を1人5～6分ずつ交代しながら実施した。授業のための機材セッティングは図1の通りである。具体的には、ノートパソコンをWeb会議システムに接続し、メインカメラとし教師役、Power Point、書画カメラの画面を切り替えた。黒板はメ

インカメラから遠くなり文字が小さくなるため、書画カメラを設置しA4サイズの用紙を黒板の代用とした。さらに、タブレットをサブカメラとして接続し、①教師役は生徒役が受信している画像を確認する、②生徒役は、Power Pointや書画カメラを使用中でも教師役の表情や目線、姿勢を確認することができるようにした。なお、模擬授業は、受講生の了解を得て録画し、授業後にTeamsで随時視聴できるようにした。

※2020年度前期の同科目は、コロナ禍の混乱の中にあっただが、模擬授業の重要性を考慮し、試行錯誤ながら遠隔授業（同時配信授業）による模擬授業を試みた。教師役は、自宅等からWeb会議に参加し、ほぼ全てのグループでPower Pointを使用した。その際、教師役の姿は画面上には映らず、準備した原稿をただ読んでいるかのような授業となり、表情や目線、姿勢などは確認できなかった。これは、教師役の経験にはなったものの、授業スキ

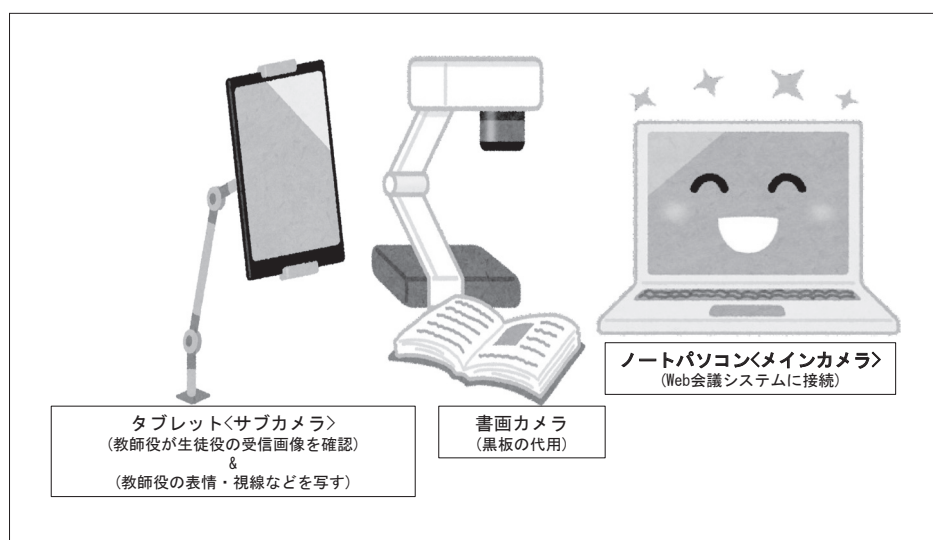


図1 模擬授業の機材セッティング

ルを身につけるというレベルには至らなかった。このため、2021年度は、模擬授業を実施する教師役は、感染対策を講じた上で大学の教室で模擬授業を行う形の遠隔授業（同時配信授業）に変更した。

- ・生徒役は、前日迄にポータルサイトで配信された「模擬授業評価シート」（以下評価シート）を、あらかじめダウンロード及びプリントアウトしたものを準備した上で、Teamsの全体「チャンネル」のWeb会議に参加した。担当教員はあらかじめ、模擬授業に参加する際には生徒役に徹することを指示していた。
 - ・授業後は、担当教員から講評を行った。また、録画した動画の活用方法として、①生徒役が「評価シート」の記入しきれなかった部分を確認する、②教師役は、授業の全体の流れや内容、自分自身の授業の状況を確認し振り返りのツールとすることを説明した。
 - ・受講生は、指定された期日までに、「評価シート」を作成し、ポータルサイトの「課題」から提出した。
- ※「評価シート」は、教師役の姿勢、教材の工夫、知識・技能等の観察項目、授業についてのコメント及び改善案を記載するものである。

るものである。

5. 評価方法

1) アンケート調査

第15回の授業終了後、受講生にMicrosoft Formsによるアンケート調査のQRコードとURLを提示し、回答を依頼した。なお、アンケートは、回答は任意であり回答しない場合も不利益は生じないこと、成績評価には関係しないこと、調査結果は統計的に処理され個人の特定はされないこと、研究以外の目的で使用しないこと、回答提出により参加の同意が得られたとすることを説明し、回収期限は1週間とした。

アンケート調査の項目は表2の通りであり、いずれも自由記述（字数制限なし）とした。

2) 分析対象

分析対象は、受講生101名のうちアンケート調査に回答した88名（3年生72名、4年生13名、科目履修生3名 有効回答率：87.1%）とした。

3) 分析方法

分析方法は、質的研究法の一つであるKJ法を援用した。まず、質問に関する記述を取り上げ、ラベル化を行う。次に、ラベルを比較検討し、類似したものをグループにまとめて名称をつけ、カテゴリーを生成した。

表2 模擬授業に関する調査

項目	内 容
項目1	模擬授業を遠隔で行い良かったと思うことがあれば記載してください。（3年生のみ回答）
項目2	模擬授業を遠隔で行い改善した方がよいと思うことがあれば記載してください。（3年生のみ回答）
項目3	模擬授業を遠隔で受けてみて良かったと思うことがあれば記載してください。（全員回答）
項目4	模擬授業を遠隔で受けてみて改善した方がよいと思うことがあれば記載してください。（全員回答）
項目5	模擬授業を遠隔で行ったことや受けたことは、自分にとってどのような経験になったかを記載してください。（全員回答）

Ⅲ. 結果

1. 教師役の立場から

1) 模擬授業を遠隔で行い良かったと思うこと（3年生のみ回答）

この項目に関して81の記述があり、「特になし」（8名9.9%）の記述を除いて6つのカテゴリに分類された（表3）。

表3 模擬授業を遠隔で行い良かった点

カテゴリー	人数 (%)
(1)遠隔授業(同時配信授業)を想定した新たな授業形態の経験	27 (33.3)
(2)コロナ禍での模擬授業の実施	17 (20.9)
(3)録画による振り返り	9 (11.1)
(4)授業に関する学習成果の獲得	8 (9.9)
(5)緊張の軽減	7 (8.6)
(6)感染リスクの軽減	5 (6.3)
(7)特になし	8 (9.9)

n = 72, 但し複数回答あり

(1) 遠隔授業（同時配信授業）を想定した新たな授業形態の経験

27名（33.3%）が【遠隔授業（同時配信授業）を想定した新たな授業形態の経験】を挙げた。具体的には、「今後の教育はインターネットやタブレット端末を用いた授業が普及されると思うので良い経験になった」や「ICT機器を使用する今までにない模擬授業を行うことができた」というように、これからの教育現場における授業形態の変化を視野に入れた回答があった。また、「どのような工夫をすれば上手く伝えられるのかを考えさせられる経験となった」や「遠隔ではどのような授業が効果的なのか分かった」というように、遠隔授業における授業改善の視点を獲得の機会

となったという回答があった。

(2) コロナ禍での模擬授業の実施

17名（20.9%）が【コロナ禍での模擬授業の実施】を挙げた。具体的には、「コロナ禍でも実際に生徒の前で授業を行う経験は座学の講義では絶対に得ることができない経験だった」や「遠隔授業という難しい状況の中で指導経験が積めた」というように、限られた状況の中でも数少ない経験となる模擬授業を実施できたことを評価する回答があった。

(3) 録画による振り返り

9名（11.1%）が【録画による振り返り】を挙げた。具体的には、「自分の授業がどんなものだったか振り返ることができた」や「授業を反復することができた」というように、対面での模擬授業とは異なる遠隔会議システムだからこそ可能となった振り返りに関する回答があった。

(4) 授業に関する学習成果の獲得

8名（9.9%）が【授業に関する学習成果の獲得】を挙げた。具体的には、「どのような工夫があればうまく伝えられるか考えさせられた」や「実際の模擬授業をする機会によって自分の良かった点や改善点を理解することができた」「自分の現在の実力を知ることができる機会だった」というように、模擬授業を実施することで自分の授業の改善の手立てが得られたという回答があった。

(5) 緊張の軽減

7名（8.6%）が【緊張の軽減】を挙げた。具体的には、「緊張が少なくやりやすかった」や「あまり緊張せずに自分のやりたいことができた」であり、遠隔により精神的負担が軽減したり、気楽な状況になったという回答があった。

(6) 感染リスクの軽減

5名(6.3%)が【感染リスクの軽減】を挙げている。具体的には、「感染リスクが大幅に下げられた」や「感染対策の1つとして良かった」という回答があった。

2) 模擬授業を遠隔で行い改善した方がよいと思うこと(3年生のみ回答)

この項目に関して72の記述があり、「特になし」(41名56.9%)の記述を除いて5つのカテゴリに分類された(表4)。

表4 模擬授業を遠隔で行い改善した方がよい点

カテゴリー	人数(%)
(1)生徒役の様子・反応を把握する難しさ	15(20.8)
(2)教師役としての不安全感	8(11.1)
(3)通信環境による問題	4(5.6)
(4)Teamsの操作の未熟さ	2(2.8)
(5)模擬授業実施前の準備・指示不足	2(2.8)
(6)特になし	41(56.9)

n = 72, 複数回答なし

(1) 生徒役の様子・反応を把握する難しさ

15名(20.8%)が【生徒役の様子・反応を把握する難しさ】を挙げている。具体的には、「生徒の反応が直に見れず伝わっているのかわかりにくかった」「生徒の雰囲気を見ながら授業が出来ないことが難しかった」や「生徒がしっかり授業に参加しているのか把握できない」「手を挙げるなどのリアクションを把握するのが難しい」であり、対面とは異なり、100名近い遠隔授業では画面を通して生徒の様子を把握することの難しさがあることに関する回答があった。

(2) 教師役としての不安全感

8名(11.1%)が【教師としての不安全感】

を挙げている。具体的には、「資料やスライドなどが見づらくなってしまった」「書画カメラから資料がずれてしまった」であり、自分自身が思い描いたあるいは準備していた授業進行にはならなかったことに関する回答があった。

(3) 通信環境による問題

4名(5.6%)が【通信環境による問題】を挙げている。具体的には、「通信環境により聞こえにくいところがあった」や「機器のトラブルがあった」という回答があった。

(4) Teams操作の未熟さ

2名(2.8%)が【Teamsの操作の未熟さ】を挙げている。具体的には、「機器の使い方が上手くできない人がいた」や「授業実施者の顔が見えなくなってしまった」という不慣れな遠隔会議システムの操作に関する回答があった。

(5) 模擬授業実施前の準備・指示不足

2名(2.8%)が【模擬授業実施前の説明・指示不足】を挙げている。具体的には、「前例がなく何をしたらよいのか正直わからないことが多かった」や「書画カメラなどの使い方の説明が事前にあるとよりスムーズにできる」という担当教員の準備・指示不足に関する回答があった。

2. 生徒役の立場から

1) 模擬授業を遠隔で受けてみて良かったと思うこと(受講生全員が回答)

この項目に関して97の記述があり、「特になし」(9名9.3%)の記述を除いて8つのカテゴリに分類された(表5)。

表5 模擬授業を遠隔で受けて良かった点

カテゴリー	人数 (%)
(1)遠隔授業(同時配信授業)を想定した新たな授業形態の経験	23 (23.7)
(2)録画による振り返り	19 (19.6)
(3)多様な授業の経験	13 (13.4)
(4)緊張の軽減、反応しやすさ、授業への集中	12 (12.3)
(5)教師役の説明・提示の見やすさ	9 (9.3)
(6)教師役の様子(表情・姿勢など)の確認しやすさ	5 (5.2)
(7)感染リスクの軽減	4 (4.1)
(8)生徒役の様子(声、反応)の確認しやすさ	3 (3.1)
(9)特になし	9 (9.3)

n = 88, 但し複数回答あり

(1) 遠隔授業(同時配信授業)を想定した新たな授業形態の経験

23名(23.7%)が【遠隔授業(同時配信授業)を想定した新たな授業形態の経験】を挙げていた。具体的には、「自分が教員になった時の受けている側の経験ができた」や「将来的にこのような授業が増えると考えられるので今の段階で経験ができたのは良かった」というような将来を見据えた上で遠隔授業を生徒の立場で経験できたことに関する回答があった。同時に、「自分たちの授業がどのような形で生徒に伝わるのかがわかった」や「対面と遠隔では見え方が変わることに気づくことができた」というように、生徒の立場でありながらも遠隔授業を教師としての視点を持ち評価しながら受けていた回答があった。

(2) 録画による振り返り

19名(19.6%)が【録画による振り返り】を挙げていた。具体的には、「授業内容をいつでも振り返ることができる」や「授業で見

逃してしまったことを見ることができる」というような、Teamsの録画機能が生徒の学習の定着につながる振り返りとして活用可能な回答があった。また、「他者の授業をしっかり評価するために何度も見直したことで自分のためにもなった」や「録画を見直せたので評価シートが書きやすかった」という回答もあった。

(3) 多様な授業の経験

13名(13.4%)が【多様な授業の経験】を挙げていた。具体的には、「他者の評価もしたため様々な視点から見れた」や「さまざまな人の指導方法が見れて自分の学びが深まった」「他の授業を聞いて自分の指導に活用できた」「自分に取り入れたら良い工夫がわかりやすかった」というように、生徒として他者の授業を受けることで、自分自身の授業の改善につなげられるような気づきが得られた回答があった。

(4) 緊張の軽減、反応しやすさ、授業への集中

12名(12.3%)が【緊張の軽減、反応しやすさ、授業への集中】を挙げていた。具体的には、「遠隔だと緊張感が解ける」「対面よりも発言やリアクションを取りやすかった」というような生徒の立場でも遠隔授業の気楽さを感じている回答があった。また、「雑音や話し声で授業が妨害されない」や「集中しやすく内容が入りこみやすかった」というような、生徒の学習効果につながる遠隔授業の有用性を示す回答があった。

(5) 教師役の説明・提示の見やすさ

9名(9.3%)が【教師役の説明・提示が見やすさ】を挙げていた。具体的には、「対面の場合うしろの方だと聞こえにくいことも

あるが遠隔ではそれがなかった」や「資料を近くの画面で確認できるので見やすかった」というような1人1台の端末を利用することやTeamsの画面共有機能のメリットを示す回答があった。

(6) 教師役の様子(表情・姿勢など)の確認しやすさ

5名(5.2%)が【教師役の様子(表情・姿勢など)の確認しやすさ】を挙げていた。具体的には、「教師役が実際にどこを見て話しているかわかり対面で行っているようだった」や「教師役行っている様子や板書(書画カメラ)が見れて疑似的に授業を受けている感覚になった」というように、遠隔であっても画面を通して教師の様子を十分に把握できたことに関する回答があった。

(7) 感染リスクの軽減

4名(4.1%)が【感染リスクの軽減】を挙げていた。具体的には、「感染の心配がなく安心して授業を受けれた」や「感染リスクが軽減された」という回答があった。

(8) 生徒役の様子(声、反応)の確認しやすさ

3名(3.1%)が【生徒役の様子(声、反応)の確認しやすさ】を挙げていた。具体的には、「生徒役の声が聞こえやすかった」や「Teamsの機能で生徒役とのコミュニケーションがとれた」というように、遠隔であっても他の生徒の様子が確認できたことに関する回答があった。

4) 模擬授業を遠隔で受けてみて改善した方がよいと思うこと(受講生全員が回答)

この項目に関して88の記述があり、「特になし」(44名50.0%)の記述を除いて4つのカテゴリに分類された(表6)。

表6 模擬授業を遠隔で受けて改善した方がよい点

カテゴリー	人数(%)
(1)通信環境による問題	18(20.5)
(2)教師の説明・提示の伝わりにくさ	12(13.6)
(3)生徒役の学習活動の難しさ	10(11.4)
(4)遠隔での模擬授業の実施	4(4.5)
(5)特になし	44(50.0)

n = 88, 複数回答なし

(1) 通信環境による問題

18名(20.5%)が【通信環境による問題】を挙げていた。具体的には、「通信環境が悪く繋がらないことがあった」「どうしても授業の進行にタイムラグがあった」や「回線の関係でところどころ見えない部分があった」という回答があった。また、「端末(パソコン、スマホなど)が異なるため見やすさに差がある」や「携帯では文字が小さくなる」というような使用する情報端末(パソコン、タブレット、スマートフォン)の差異によって発生することに関する回答があった。

(2) 教師の説明・提示の伝わりにくさ

12名(13.6%)が【教師の説明・提示の伝わりにくさ】を挙げていた。具体的には、「声の大きさが伝わりづらいことがあった」や「資料などが見えづらいことがあった」というように、常時ではないものの音声や映像の不具合があったことに関する回答があった。

(3) 生徒役の学習活動の難しさ

10名(11.4%)が【生徒役の学習活動の難しさ】を挙げていた。具体的には、「生徒同士のコミュニケーションが少なかった」「生徒とのやりとりが少なくなっていた」や「生徒同士のグループ学習がなかった」というような、生徒役同士の自由な対話をするものの難しさに関する回答があった。ただし、中に

は「Teamsであればブレイクアウトルームを活用して授業を進められると思う」や「Teamsでいくつか部屋を作って監視役を置き少数で模擬授業を行うことができると思う」というような遠隔授業での工夫を提案する回答もあった。

(4) 遠隔での模擬授業の実施

4名(4.5%)が【遠隔での模擬授業の実施】を挙げていた。具体的には、「対面での教員の技能が伸びづらい」や「実際に生徒の前で行った方がよい」というような対面での模擬授業を望む回答があった。

3. 受講生としての経験について

1) 模擬授業を遠隔で行ったあるいは受けたことは、自分にとってどのような経験になったか(受講生全員が回答)

この項目に関して93の記述があり、5つのカテゴリに分類された(表7)。

表7 模擬授業を遠隔で行う・受けることがどのような経験になったか

カテゴリー	人数 (%)
(1)遠隔授業(同時配信授業)を想定した新たな授業形態の経験	38 (40.9)
(2)授業に関する学習成果の獲得	25 (26.9)
(3)ICT機器の操作の習得	12 (12.9)
(4)多様な授業の手法を知る	10 (10.7)
(5)自分自身を知る	8 (8.6)

n = 88, 複数回答なし

(1) 遠隔授業(同時配信授業)を想定した新たな授業形態の経験

38名(40.9%)が【遠隔授業(同時配信授業)を想定した新たな授業形態の経験】を挙げていた。具体的には、「遠隔授業が止むを得な

くなった時に、先生・生徒の立場や気持ちが分かる経験となった」や「先生・生徒の立場で顔の見えない生徒への授業を行えたのは他の講義とは異なる体験となり参考になった」というような、教師としてのみならず生徒の視点から遠隔授業を受けた経験を評価する回答があった。さらに、「通常なら経験できない授業方法を行えたので、遠隔授業で感じた困難さを対面授業により還元していきたい」「遠隔で人に物事を伝えるのが難しい中、工夫を凝らせたことが一番の良い経験となった」や「今までにない模擬授業であり今後の自分自身の指導の幅が広がった」「特別な事情で授業に参加できない生徒に学ぶ機会を作る際に今回の経験は力になる」というような、今回の経験を今後の様々な状況や機会で作らせる可能性を示唆する回答があった。

(2) 授業に関する学習成果の獲得

25名(26.9%)が【授業に関する学習成果の獲得】を挙げていた。具体的には、「生徒が授業に集中するための工夫として、機材を使った授業を行うことにつながる経験だった」や「授業の構成や、どのような内容に焦点を当てるとよいか考えることが出来た」というような遠隔授業を教育技術の視点から捉え、授業デザインに生かそうとする回答があった。また「遠隔授業ではやり方によっては視覚的な内容を充実させることが出来るので、より学習効果の高い授業を行えると思った」や「初めて生徒に話す言葉というものを考えることができた」というような、遠隔授業において画面共有機能の活用可能性や音声情報としての言葉の重要性について考えた回答もあった。さらに、「授業で教えるだけでなく、事前準備から授業評価までさまざまな過

程があり意味があることを理解できた」や「指導案作成から授業実践までの一連の流れを体験することができ学びとなった」というような授業準備から実施、終了までの見通しが持てるような経験となった回答があった

(3) ICT機器の操作の習得

12名(12.9%)が【ICT機器の操作の習得】を挙げていた。具体的には、「ICT機器は苦手だったが強制的に使うことで経験になった」「パソコンを使いこなすことができるようになった」や「パソコンに馴染みがなかったが操作方法を学びながら模擬授業の準備ができたことがプラスとなった」というような、やむに止まれず行ったものではあったものの自分自身のICT技術の獲得につながる経験となった回答があった。

(4) 多様な授業の手法を知る

10名(10.7%)が【多様な授業の手法を知る】を挙げていた。具体的には、「自分とは異なる考えや指導方法を触れる機会となった」「色々な模擬授業を受け、方法や手段の幅が広がった」や「他の指導方法を見て、自分の技術として取り込むことが出来た」というような、教授技術の向上につながるような経験となった回答があった

(5) 自分自身を知る

8名(8.6%)が【自分自身を知る】を挙げていた。具体的には、「自分の癖を見つけることができた」「自分に足りない部分を見つけることができた」や「授業でうまく話すことができないことがわかり、これから日常生活で意識しようと思った」というような自己の癖や行動を客観視できた経験となった回答があった。

Ⅳ. 考 察

まず、遠隔会議システムを利用した遠隔授業(同時配信授業〈同期型〉)で模擬授業の実施の効果について考えてみたい。1つ目としては、多くの受講生が評価していた【遠隔授業(同時配信授業)を想定した新たな授業形態の経験】ができたことである。受講生も回答の中で予測していたように、コロナ禍の収束の見通しが立っていない現状において、今後受講生が教育実習あるいは教員として現場で勤める際も、「ウィズコロナ」「ポストコロナ」の中で、中学校・高等学校の授業形態は状況に合わせて変化し柔軟な対応が求められるだろう。また、すでに文部科学省では、2020年代の早期に全ての初等中等教育段階の遠隔教育を活用した教育の質の向上を図るための必要な施策を推進している²⁰⁾。このことから、近い将来、教育現場では、本科目での模擬授業のような遠隔授業(同時配信授業〈同期型〉)は必須となることが考えられる。このような中で、今回受講生が教師役・生徒役の両方の立場で遠隔授業という新たな授業形態を経験したことは、その方法や流れなどについて具体的なイメージをつかみ、今後のさまざまな状況や機会に生かせる力の一つになり得たと言える。

2つ目としては、【録画による振り返り】ができたことである。これは遠隔会議システムを用いた授業実践の優れた点であるとも言える。対面授業での模擬授業でもビデオなどで録画することは可能であるが、ビデオを固定すると教師役の表情や目線、姿勢などの細かな部分と板書の詳細を同時に撮影することは難しかった。今回、書画カメラを黒板の代

用として設置したことで板書内容が画面上に提示され、タブレットのサブカメラによりPower Pointや書画カメラの使用中でも教師役の表情や目線、姿勢が画面上に同時に映し出された。このことは、生徒役の【教師役の説明・提示の見やすさ】【教師役の様子（表情・姿勢など）の確認しやすさ】という評価として現れている。そして、授業の様子を記録として残し、後から確認することを通して、教師役は自身の指導を振り返ったり、授業改善の手立てとなる授業の分析を行うことが容易になったと考えられる。また、生徒役の「他者の授業をしっかりと評価するために何度も見直したことで自分のためにもなった」という回答にもあるように、他の受講生の授業を見返せたことは、自分自身の授業の改善の視点を得ることもつながったと言える。さらに、生徒役の「授業をいつでも振り返ることができる」や「授業で見逃してしまったことを見ることができる」という回答から、実際の教育現場においても、生徒が何度も記録を振り返ることにより学習の定着につながるものとして活用可能であることをあらためて認識することができたことは、担当者（筆者）としても収穫であった。このことから、遠隔授業（同時配信授業〈同期型〉）の模擬授業や振り返りの活動は、対面授業の代替としてではなく、効果的な学習活動としての可能性があることが示唆されたと言えるだろう。

3つ目としては、【授業に関する学習成果の獲得】ができたことである。これは、【多様な授業の手法を知る】や【録画による振り返り】も関連しているものであると言える。当初、担当教員として遠隔授業（同時配信授業〈同期型〉）で実施を工夫して行うことを

決めたものの、これまで教室での対面授業（＝実際の授業を想定した場）で実施してきた模擬授業を遠隔授業（同時配信授業〈同期型〉）で行い、果たして本科目の到達目標の1つである「模擬授業の実施とその振り返りを通して、授業改善の視点を身につける」ことが可能なのかという懸念は拭いされずにいた。しかし、受講生からは「どのような工夫で伝えるか考えさせられた」「授業の構成を考えることができた」「どこに焦点を当てると良いか考えることができた」「集中させるための工夫として機材を使う」「初めて話し言葉について考えた」といったいわゆる教師としての基礎的な授業の実践力について意識していたことが示された。さらに、「自分の良かった点や改善点が理解できた」「現在の実力を知る機会だった」など自分自身の姿勢を見直すものもあった。これらはいわゆる「省察」と言われるもので、授業の改善力を高めるものとして、これまでも多くの研究がなされているが^{3) 7) 8)}、今回の結果から従来の対面授業における模擬授業と同等の学習成果を得られたことが示唆された。

以上のような効果が得られた反面、遠隔会議システムを利用した遠隔授業（同時配信授業〈同期型〉）で模擬授業の実施の課題もある。1つ目は、【生徒役の様子・反応を把握する難しさ】である。先述したように、メインカメラ、書画カメラ、サブカメラを使用することで、Power Pointや書画カメラ使用中でも教師役の表情や目線、姿勢が画面上に同時に映し出すことはできた。しかし、教師役は、Teams上の画面に映る生徒の数は限られているため、100名近い生徒役の授業中の様子や反応を把握することは実質不可能で

あった。授業は、教師からの働きかけに対する生徒の反応という相互のやりとりによって、その展開は変化していく。そして、教師が生徒の細かな様子（表情や視線、姿勢など）を把握することも重要な役割を果たすことになる。今回のような大人数での遠隔授業の場合、【生徒役の学習活動の難しさ】で受講生からの提案にあったTeamsのブレイクアウトルームを活用することも1つの方法ではある。しかし、その場合でもリアルタイムで生徒の様子を確認したり、対応することは難しいと考えられるため、引き続き検討を重ねたい。

2つ目は、【通信環境による問題】である。通信環境の接続状況による音声や映像が途切れたりタイムラグや使用する情報端末（パソコン、タブレット、スマートフォン）のフリーズなどのトラブルが発生し、授業に参加できない、あるいは進行状況がわからなくなることがあった。この点については、担当者として対応できることには限りがあるが、学内の専門部署と連携を図っていきたい。

最後に、担当教員として遠隔会議システムを利用した遠隔授業（同時配信授業〈同期型〉）で模擬授業の実施する上で改善すべき点について述べる。それは【模擬授業実施前の準備・指示不足】である。Teamsは2020年度から本学で全学的に推奨されたシステムであり、本科目の受講生は使用方法を理解していたとはいえ、それはあくまで授業を受ける立場でのことであり、授業を行う立場での経験は数少ない。このため、Teamsの共有画面機能やメインカメラと書画カメラの切り替えの操作がスムーズに行かなかったり、メインカメラとサブカメラのどちらに向かって

話をしたらよいのか右往左往することがあった。今後は、機材セッティング、Teamsの操作機能、書画カメラの使用方法などについて、担当教員のデモンストレーションを動画で記録し配信するなどして周知し、教師役が模擬授業を不安なく実践できるように改善を図りたいと考えている。

V. まとめ

本研究では、本学で開講されている教職に関する科目「保健体育科教育法Ⅲ」において、遠隔会議システムを利用した遠隔授業（同時配信授業〈同期型〉）で模擬授業を実施し、受講生による評価を通して、遠隔授業における模擬授業の実施方法、効果と課題を論述した。

教育再生実行会議の「ポストコロナ期における新たな学びの在り方について（第十二次提言）」²¹⁾では、コロナ禍を契機として急速に普及・進展している遠隔・オンライン教育は、高等教育の新たな可能性を拓くものとされ、面接授業と遠隔・オンライン教育を効果的に組み合わせたハイブリッド型教育の確立などの取り組みの検討することについて明記されている。今後の遠隔・オンライン教育の普及に伴い、模擬授業の実践についてさらに知見を深め、検証を重ねていきたい。

VI. 引用・参考文献

- 1) 文部科学省(2017):教職課程コアカリキュラム. 教職過程コアカリキュラムの在り方に関する検討委員会.
- 2) 文部科学省(2015):これからの学校教

- 育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教育育成コミュニティの構築に向けて～(答申). 中央教育審議会.
- 3) 福ヶ迫善彦, 坂田利弘 (2007): 授業省察力を育成する模擬授業の効果に関する方法論的検討. 愛知教育大学保健体育講座研究紀要, 32. 32-42.
 - 4) 木原成一郎, 村井潤, 加登本仁, 謝娟, 松下篤, 林楠, 松田泰定 (2009): 教員養成段階で行う体育の模擬授業の効果に関する事例研究(その2) - テスト映像を視聴した学生が気づいた体育授業の要素 -. 学校教育実践学研究, 15. 29-37.
 - 5) 徳永隆治 (2009): 模擬授業による体育授業づくりの意識形成に関する事例的研究. 安田女子大学紀要, 37. 197-207.
 - 6) 宮尾夏姫, 三木ひろみ, 柴田俊和 (2014): 体育科模擬授業における学習成果 - 授業・授業づくりの要点の理解と学習を促す授業体験の事例的検討 -. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 12. 93-104.
 - 7) 田井健太郎, 河合史菜, 元嶋菜美香, 久保田もか, 高橋浩二, 宮良俊行 (2018): 教員養成課程における模擬授業の省察に関する研究. 長崎国際大学論叢, 18. 31-46.
 - 8) 大矢隆二, 柳瀬慶子 (2021): 「省察」の質的な深まりに着目した教員養成課程の模擬授業に関する研究(Ⅱ) - 体育科教育法の授業を対象として -. 國學院大学人間開発学部研究, 12. 47-60.
 - 9) 竹田唯史, 杉岡品子, 吉澤正伸, 佐藤亮平, 近藤雄一郎, 森靖明 (2016): 教員養成課程大学における保健体育科教育法の指導について. 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 7. 41-56.
 - 10) 木内剛 (2004): 模擬授業. 日本教育方法学会(編), 現代教育方法事典. 東京: 図書文化.
 - 11) 文部科学省 (2020): 令和2年度における大学等の授業の開始等について(通知). https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf (2021年12月24日参照).
 - 12) 文部科学省 (2020): 新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況. https://www.mext.go.jp/content/20200527-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf (2021年12月24日参照).
 - 13) 文部科学省 (2021): 令和3年度の大学等における授業の実施と新型コロナウイルス感染症の対策等に係る留意事項について(周知). https://www.mext.go.jp/content/20210305-mxt_kouhou01-000004520-02.pdf (2021年12月24日参照).
 - 14) 文部科学省 (2021): 新型コロナウイルス感染症対策の基本的対処方針の変更及び大学等における同感染症への対応に関する留意事項等について(周知). https://www.mext.go.jp/content/20210510-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf (2021年12月24日参照).
 - 15) 安藤江里 (2020): 学部教育におけるオンラインでの音楽指導の試み. 教育総合研究, 4. 237-248.
 - 16) 青山拓実 (2020): 同期型オンライン授業での模擬授業の実践 - Zoomを用いた英語科模擬授業における利点と課題 -. 信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター紀要『教育実践研究』, 19. 21-29.
 - 17) 小林田鶴子 (2021): オンラインを活用

- した音楽の授業－音楽科教育法を中心として－. 神戸女子大学教職課程研究, 4, 1-9.
- 18) 松井孝夫 (2021) : オンラインによる模擬授業演習から得られたもの－学生の省察をもとに振り返る－. 音楽文化研究, 20, 91-103.
- 19) 木内剛 (2004) : マイクロティーチング. 日本教育方法学会 (編), 現代教育方法事典. 東京 : 図書文化.
- 20) 今井裕一 (2021) : 遠隔教育システムの効果的な活用に関する実証成果報告会. 文部科学省. https://www.mext.go.jp/content/20210308-mxt_jogai02-000010043_001.pdf (2022年1月10日参照).
- 21) 文部科学省 (2021) : ポストコロナ期における新たな学びの在り方について (第十二次提言) 教育再生実行会議.